

令和7年度（2025年度）

第2回知床世界自然遺産地域連絡会議

議 事 録

日 時：2026年3月25日（水）午後1時開会
場 所：羅臼町コミュニティーセンター

1. 開会

●北海道（島村） ただいまから令和7年度第2回知床世界自然遺産地域連絡会議を開催いたします。

本日は、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。

本日の司会進行を務めさせていただきます北海道環境生活部自然環境課の島村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今回の地域連絡会議は羅臼町での開催となりまして、Zoomによるオンライン会議システムを併用しております。オンライン参加の皆様におかれましては、発言時を除き、音声をオフにさせていただきますよう、お願いいたします。

2. あいさつ

●北海道（島村） それでは、開会に当たりまして、北海道環境生活部自然環境局長の新井田よりご挨拶を申し上げます。

●北海道（新井田） 北海道自然環境局長の新井田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

知床世界自然遺産地域連絡会議の会長の立場で、一言、ご挨拶をさせていただきます。

本日は、年度末の大変お忙しい中、羅臼町の湊屋町長様、斜里町の山内町長様をはじめ、多くの皆様にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

皆様におかれましては、日頃から、知床世界自然遺産の保全管理に関し、ご尽力をいただいておりますことにこの場をお借りして御礼申し上げます。ありがとうございます。

この地域連絡会議は、遺産地域の在り方の検討などのため、地域の皆様からご意見を伺う合意形成の場ということで、大変重要な会議だと認識しております。

本日の会議は、定例の各種報告がありますが、説明は最小限としまして、後半で昨年の羅臼岳の人身事故の対応についてご意見をいただく時間を設けておりますので、よろしくお願いいたします。

羅臼岳の件につきましては、昨年11月の連絡会議において皆様から多くのご意見等をいただきました。その後、ヒグマ対策連絡会議を中心に議論が行われてまいりまして、山岳会の皆さんを交えた地域の説明会を経て、2月のヒグマワーキンググループ、3月の科学委員会、適正利用・エコツーリズムワーキンググループの中でいただいた皆様からのご意見を踏まえ、再発防止策の方向性を取りまとめました。

本日、この会議で皆様にご最終のご確認をいただき、来年度に向けて対応を進めていきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

また、今年度は、世界自然遺産登録20周年ということで、これまで2か年にわたって様々な行事や取組が行われてまいりました。20年を振り返る中で、成果とともに課題等も見えてきたと思っております。特に、温暖化に伴う海や植生の変化、人と野生動物との

あつれきの高まり、さらに、地域の人口減少と、自然や社会の変化に対応するという
ことで、地域連絡会議が20周年を契機としてさらに地域の方々に必要とされるように進化し
ていかなければならないと強く思っております。

知床の不変な価値をよりよい形で後世に引き継いでいくため、地域の皆様並びに関係機
関・団体の皆様に引き続きご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

●北海道（島村） 続きまして、開催地の羅臼町の湊屋町長よりご挨拶を頂戴します。

●羅臼町（湊屋町長） 皆様、お疲れさまでございます。

二つの自治体を移動するのに距離が遠くなる時期でして、遠回りして来ていただいた方
もいらっしゃると思います。日頃より、北海道をはじめ、環境省、林野庁、また、北海道
開発局の皆さんをはじめ、多くの皆さんにお世話になり、知床世界自然遺産の環境保全、
また、適正な利用についても協議していただいていることに両町を代表して心からお礼を
申し上げます。

ただいまお話がありましたけれども、これだけの人が集まる会議は年に2回ですので、
ぜひ、この機会に日頃活動している方も含めていろいろなご意見を頂戴できればと思っ
ているところです。

令和7年度につきましては、様々なことがございました。一番大きいのは羅臼岳での事
故ですが、それ以外も、ここ数年、幾ら自然遺産の地とはいえ、環境の変化が著しいと肌
で感じるようになってきております。

そういった中、羅臼町としては、3月の初めにネイチャーポジティブ宣言をさせてい
ただいております。これは、先ほど言ったように、保全という考え方だけでは追いついて
いかないというか、与える影響が非常に大きいのです。ですから、それよりももっと頑張
っていかねばいけませんし、生物多様性の損失をしっかりと食い止めていかねばい
けないという思いの下、また、それをさらに反転させて回復軌道に乗せていく取組をこの
地域では先進的に行っていかなければいけないという思いで宣言をさせていただいたと
ころです。

ただ、羅臼町だけ、また、知床だけでそういったことをしてもなかなか難しい問題が多々
あります。ですから、今日ご参会の皆さん、また、ウェブでご参加の皆さんのほか、あら
ゆるいろいろな方々にご理解とご協力をいただければとお願いを申し上げます。

この会が皆様のご意見を頂戴しながら成功裏に終わることをご祈念申し上げまして、
開催地である羅臼町としてのご挨拶とさせていただきます。

今日は、どうぞよろしくお願いいたします。

●北海道（島村） 本日の配付資料ですが、次第、参加者名簿の次に一覧を掲載しておりますので、不足等がございましたら事務局までお申しつけください。

3. 議事

●北海道（島村） それでは、議事次第に沿って進めてまいります。

本日も議題が多岐にわたっておりますが、皆様からのご提案やご発言の機会をたくさん設けたいという趣旨の下、資料につきましては事前にお目通しいただきたいと思ひまして、会議前に送付させていただきました。

また、前回に引き続き、本日の会議では、事務局からの報告、説明の時間をできるだけ最小限としまして、様々なお立場で活躍されている地域の皆様からなるべく多くの発言をいただけますよう進行してまいりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

つきましては、議事（1）の知床世界自然遺産地域連絡会議各部会からの報告のシンボルマーク等管理部会からの報告は、資料1をご参照いただきまして、会議での説明は割愛させていただきます。また、知床ヒグマ対策連絡会議からの報告につきましては、議事（4）でまとめて報告させていただきます。

続きまして、議事（2）の知床世界自然遺産地域科学委員会及び各ワーキンググループ・アドバイザー会議における検討事項の報告について、事務局から説明をお願いいたします。

●北海道（黒田） 北海道環境生活部自然環境課の黒田と申します。

私から、資料2について、要点をかいつまんで説明させていただきます。

資料2-1の科学委員会からの報告についてです。3月1日に赤れんが庁舎で開催されました。

まず（1）各ワーキンググループ等の検討状況についてです。

各ワーキンググループでの検討事項につきまして、各座長からご報告をいただきました。その内容につきましては、後ほど資料2-2以降で説明をさせていただきます。

加えて、以前から問題となっております岩尾別川でのヒグマ対策の取組について、環境省から報告がありました。こちらについても、後ほど説明させていただきます。

続きまして、（2）世界自然遺産地域管理計画の見直し作業予定について、それから、（3）羅臼岳ヒグマ人身事故における対応状況については、いずれもこの後の議事に入っておりますので、説明は後ほどさせていただきます。

裏に来年度、令和8年度の科学委員会及びワーキンググループの開催予定を記載しておりますので、後ほどご確認ください。

続きまして、資料2-2以降、各ワーキンググループからの報告をかいつまんで説明いたします。

まず、資料2-2ヒグマワーキンググループですが、7月と2月の2回開催されており

ます。先ほど触れました岩尾別川のヒグマ対策についても議論されました。

資料に四角ポツが二つございますけれども、主に岩尾別川のヒグマ対策、羅臼岳での人身事故における検証及び再発防止策。この2点について、ヒグマワーキンググループで議論されました。

まず、1点目の岩尾別川のヒグマ対策について、委員の先生方からは、アクセスコントロールは体制を整えば早く実施すべきではないか、常習者には刑事告発が可能となるよう、自然公園法の運用を改善すべきではないか、ワーキンググループとして緊急声明の発出を科学委員会に提案することの承諾等が話し合われました。

2点目は、本日の後半の議事でもある羅臼岳のヒグマによる人身事故の検証と再発防止策についてです。委員の先生方からの主な意見としては、対応実施時期の前倒しの提案のほか、登山者へ発信するリスク評価の区分については人の行動も考慮すべきではないか、捕獲強化を行うに当たって、ヒグマの行動段階判断においては、それぞれの個体の行動履歴を考慮すべきではないか、といったご助言をいただきました。

このようなワーキンググループでのご助言を踏まえた最終案は、この後、議事（4）で報告をさせていただきたいと思っております。

続きまして、資料2-3の岩尾別川のヒグマ対策の概要について、環境省からご報告があったものです。ヒグマの人慣れと人身事故の防止を最優先課題として、現地での口頭指導や移動要請の実施、巡視体制の強化、定点カメラによるモニタリングの実施等を行い、危険事例や滞留者減少などの抑止効果が確認されたとの報告がありました。

しかしながら、2ページ目ですが、巡視職員の人的限界や多様化した利用者、あるいは、巡視を回避するような悪質化等の課題も見えてきたので、来年度以降、利用者の行動特性に応じた対策を組み合わせる実施していく旨のご報告でした。

続いて資料2-4のエゾシカワーキンググループの経過報告・今後の予定についてです。

エゾシカワーキンググループにつきましては、6月と11月の2回実施されまして、11月につきましては、エゾシカによる植生への影響を科学的に検討する植生指標検討部会が併せて開催されました。

エゾシカワーキンググループの主な議論は3点です。

一つ目は、2025シカ年度の実施状況の報告です。高山植生影響調査や森林植生影響調査の報告、それから、知床岬地区で試行中の自動撮影カメラを用いた調査が航空機で実施している既存調査に代わる有効な調査手法となる可能性が示唆された点の報告がございました。

続いて二つ目ですが、2026シカ年度の実行計画についての報告がありまして、2026年度は、知床岬地区での厳冬期の巻狩りを最優先で実施すること等の合意が得られております。

最後に三つ目ですが、植生指標検討部会については、目標としていた1980年代初頭の状態は気候変動により変化している可能性があり、変遷過程をモニタリングしつつ、複数のシナリオを想定した上で、今後の議論、検討を進めていくというお話がございました。

資料2-5の海域ワーキンググループの経過報告・今後の予定についてです。

海域ワーキンググループは、7月と2月に開催されました。(1)知床世界自然遺産地域多利用型統合的・海域管理計画定期報告書(案)についてですが、第2期長期モニタリング計画における海域ワーキンググループの担当項目についてまとめた定期報告書についての検討及び最新データに基づく評価を実施しました。

(2)第47回世界自然遺産委員会決議に係る対応について、前回11月の地域連絡会議でもご議論いただきましたが、昨年の世界遺産委員会の決議に係る海域部分の今後の対応についての検討を行いました。

(3)令和8年度以降海域ワーキンググループに係る予定についてですが、来年度以降、3か年分の海域ワーキンググループの予定について共有を行いました。

続いて、資料2-6の河川工作物アドバイザー会議の経過報告・今後の予定をご覧ください。8月と1月に開催されまして、主な議事内容は(1)長期モニタリングについて(報告)、(2)令和7年度の実施状況と計画・検討について、(3)その他です。詳しくは記載をご確認いただければと思います。

その中で、主な検討事項がどのようなものであったか、裏面にまとめてあります。

河川工作物アドバイザー会議からの検討課題ということで、表面の議事の中で出てきた検討課題を記載しております。

一つ目は、オショロコマ等長期モニタリング調査計画について、二つ目がカラフトマス遡上調査について、三つ目がルシャ河床路について、四つ目がサシルイ川治山ダムの効果検証についてです。

その中でも、地域連絡会議に関係する部分として、(2)カラフトマス遡上調査についてをご覧ください。

長期モニタリング計画の対象河川である斜里側のルシャ川とテッパンベツ川、そして、羅臼側のルシャ川の3河川につきましては、2年に一度のペースで9月から10月にかけて遡上数と産卵床数を調査しておりますけれども、昨年は、例年と同時期に調査を実施した際、遡上、産卵床ともに確認することができなかったという報告がありました。一方、8月下旬から9月上旬のルシャ川で行った別の調査では確認されたことから、遡上時期が早まっている可能性が指摘されました。

いずれにしても、河川工作物アドバイザー会議だけで検討する課題ではなく、海域ワーキンググループと合同で科学的な見地から検討すること、そして、絶滅に向かって深刻に見える数値でもあることから、漁業関係者の皆様とも情報を共有し、最悪の絶滅とい

うシナリオを避けるために、お互いの立場で知恵を出し合う機会を設けることの提案もありました。

来年度早々に事務局で今後の進め方等について検討しまして、特に漁業関係者の皆様と意見交換できる場、場合によっては地域連絡会議の機会を使って科学の知見と地域の意見を踏まえた対応策を検討していきたいと思っております。

具体的には改めて相談させていただきますけれども、そのときは、ぜひ地域の皆さんのお知恵をお借りして、地域の皆様、科学委員会、行政機関が一丸となって対応を検討させていただきたいと思っておりますので、改めましてご協力をよろしくお願いいたします。

続いて、資料２－７の適正利用・エコツーリズムワーキンググループ及び検討会議の経過報告・今後の予定をご覧ください。

３月１０日に開催しておりますけれども、午前中にワーキンググループで委員の先生方を中心に、午後は地域の皆さんも交えた検討会議ということで、長期モニタリング計画に基づく調査結果の報告、個別部会や各機関からの進捗・取組の報告、インタープリテーション全体計画の進捗、知床エコツーリズム戦略の見直し等を実施しております。

羅臼岳のヒグマによる人身事故の検証と再発防止策についても、適正利用・エコツーリズムワーキンググループと検討会議で議論されました。地域の皆様にご参加をいただいた検討会議に関しましては、かなり具体的なお提案等もたくさんいただきまして、この後、最終の確認をもって、いよいよ実行のフェーズに移っていかなくてはなりません。以上、報告いたします。

長くなりましたけれども、資料２についての説明は以上です。

●北海道（島村） ただいまの報告につきまして、ご質問等がございましたらご発言をいただきたいと思っております。

（意見なし）

●北海道（島村） それでは、次の議事に移ります。

議事（３）知床世界自然遺産地域管理計画の改定に係る連絡事項について、事務局から説明をお願いします。

●北海道（黒田）引き続き北海道環境生活部自然環境課の黒田より説明します。資料３の知床世界自然遺産地域管理計画改定に係る指摘及び対応をご覧ください。

昨年１１月の第１回地域連絡会議におきましては、地域の視点から様々なご議論をいただきまして、本当に感謝しております。ありがとうございます。

改めて、その際のご議論内容、ご指摘内容につきまして、資料３にまとめさせていただいております。計画本文に関する具体的なご指摘については、主に３点ございました。

まず、１点目ですが、ウトロ地域協議会の桜井事務局長から、おおむね１０年という表

記についてご指摘がありました。長期モニタリング計画期間が10年のため、目安は10年ですが、自然環境や社会環境の変化に応じて適宜見直しを行うということで整理させていただいております。

2点目と3点目は、羅臼漁協の任田参事からご発言がありました「資源」という言葉の確認と表記の修正です。「資源が豊富で」という表記については、当日のご議論のとおり、現在の状況を踏まえて「資源を利用し」という表現に修正をしております。3点目ですが、「十分な資源の配分の確保」とは一体どういうことかというご発言がありましたけれども、この資源については遺産管理者に対しての必要な措置や資源という文脈でありまして、漁業資源という文脈ではないことを当日に確認しております。

11月の地域連絡会議におきまして皆様からいただいたご意見はこの3点でした。

令和4年度から長い期間をかけて皆様に様々なご議論をいただきました管理計画につきましては、現在、環境省、林野庁、文化庁、北海道の四つの管理機関で事務的な最終の決裁手続を進めているところです。決裁が完了次第、施行となりますことをご報告させていただきます。

●北海道（島村） ただいまの報告に関してご質問はございませんか。

（意見なし）

●北海道（島村） 無いようですので、次の議事に移ります。

議事（4）の羅臼岳ヒグマによる人身事故における対応についてです。

こちらについては、3月10日の適正利用・エコツーリズムワーキング及び検討会議で詳しく説明しておりますが、改めて事務局からポイントをかいつまんで説明させていただきます。

●知床分室（三井） 資料4-1から資料4-4で説明させていただきます。

今回は、地域連絡会議の事務局ということで、知床ヒグマ対策連絡会議の一構成機関として説明させていただきます。

今回の事故の検証と対策につきましては、環境省、林野庁、北海道、斜里町、羅臼町、標津町と知床財団で構成されている知床ヒグマ対策連絡会議で検証を行っております。

今年度の会議につきましては、今まで、この議題で、これまで通常回を含み10回を超える会議を実施しておりますが、本日は、再発防止策の概要を説明させていただきまして、地域の皆様からご意見を伺い、最終的にその方向性が確認できましたら、現在、各関係機関で再発防止策の準備を始めているところではありますが、登山道の再開に向けて取組を進めていきたいと思っております。

早速ですが、資料4-1の別紙1をご覧ください。

まず、上段にあります事故の原因とリスクについてです。

原因としましては、突然の遭遇や親熊が子熊を守るための防衛的な攻撃、または、問題

個体の存在によるヒグマによる積極的な行動が考えられます。

事故発生当時、被害者がヒグマに攻撃された瞬間が直接目撃されていないこともありまして、その原因については憶測の域を出ないのですけれども、考え方としましては、突然の遭遇や防御的攻撃の見方が一つと、問題個体による積極的な攻撃も否定できないと考えております。

また、被害者の方は、事故発生当時、熊鈴は携行していましたが、早めのペースで単独で行動しておりまして、熊撃退スプレーの所持や使用は確認できませんでしたので、こういった要因を踏まえつつ再発防止策を検討してきたところです。

基本的に、登山に関しましては、人の手によって管理されていない自然の中での活動ですので、ヒグマの生息地におけるリスクを把握し、いかに情報提供していくかが今回の事故の再発防止策として重要だと考えております。

次に、検証についてです。

左側の枠ですが、ヒグマの生息地での登山の行動規範、ヒグマとの突然の遭遇を避ける行動、熊鈴や熊撃退スプレーの携行、ごみや食料の管理などが一般の登山者の方には十分に認知されておらず、登山利用者の行動変容に至っていない可能性があることを整理しております。

次に、真ん中のフローは、問題個体の存在が確認されたときにどう対応していくかです。今回、当該個体が確認されたことを受けて、登山口で情報提供し、ヒグマ撃退スプレーの携行の推奨や強い注意喚起をするべく登山口への掲示を行ったのですけれども、同行者の聞き取りによりますと、記憶に残るような効果はなかったことが判明しました。これを踏まえ、危機感を伝えて行動変容を促すような注意喚起の手法を検討することが必要であると考えております。

また、今回の危険情報は一般登山者からの情報であり、情報の確度が難しいところでもあります。その翌日に関係機関が調査するという対応を取ったのですけれども、その際には追加の情報が得られなかったということで、閉鎖ではなく注意喚起にとどめたところです。こういったことを踏まえ、伝聞情報に基づく危険評価が難しい場合は、どのように意思決定をして、危険事案が発生したときには登山道を閉鎖する基準や手順が整理されていなかったため、これについて対応していきたいと考えております。

具体的なお話については、後ほど別紙で説明いたします。

問題個体が確認された際の評価と対応のフローを再整理し、行動変容に結びつくようなリスク評価に基づいた注意喚起を行うこと、それから、登山口の閉鎖を含む対応の基準を明確化することを再発防止策として整理しております。

検証の一番右側の部分ですが、今回の事故の加害個体は、これまでもたびたび人の近くにいる個体で、人を忌避しない問題個体であることが確認されております。このように人を恐れず、人を積極的に避けない、人慣れした個体が増加していることは事故の要因と考えております。

このような個体が増加している背景としては、人間側の要因で、熊に興味を持ち、恐れず、写真撮影などの過度な接近のほか、餌を投げ込むなど、人慣れを増長させるような不適切な行為がこれまで問題になっておりました。これをいかに抑制して問題個体を発生させないことが非常に重要ですので、問題個体の発生抑制を再発防止策として整理しております。

次に、課題ですが、再発防止策の一番左のフローの登山者等への情報提供についてです。

ここにつきましては、資料4-2にまとめております。

2ページをご覧ください。

登山利用者への情報提供のフローのイメージです。

登山の直前だけではなく、登山を計画する段階からできる対策を記載しております。

3ページは、リスク情報の効果的な発信ということで、コンテンツの全体増の案を示しております。

4ページは、登山利用者向けのウェブサイトの新設についてです。

現在、知床には数多くのウェブサイトやSNSでの情報発信が行われていますが、登山に対してのサイトはないということで、今後、新設することを考えております。

5ページは、知床の登山というホームページを新たに作成するとともに、そこに現場のリアルタイム情報をリンクさせて登山者にその情報を伝えられるような仕組みづくりを考えております。

続いて、6ページをご覧ください。

登山口に新しく設置する登山前チェックシートにより、登山利用者の登山やヒグマに関する準備を促すとともに、入山人数や大まかな登山行程を把握するものです。並行して、登山計画書の提出についても徹底しなければならないのですけれども、入山時にこのような内容を把握することが検討されているということです。

続いて、7ページをご覧ください。

登山の装備としては、熊撃退スプレーをしっかりとっていただくために、レンタルの強化のほか、フードコンテナ等の利用を推奨するというのをそれぞれの機関で考えていただいています。特に、熊撃退スプレーについては、貸出し本数を大幅に増加しまして、各施設から借りられるような形を取ることを進めております。

次に、8ページをご覧ください。

登山口までの移動の途中で様々な情報提供ができるように、既にレンタカー事業者に対してはヒグマリーフレットを配布しており、こういったところと連動しながら啓発を進めてまいりたいと考えております。

続きまして、フローの真ん中の再発防止策についてですが、資料4-3をご覧ください。

2ページ目をご覧ください。

ヒグマ情報の受発信と危険事案発生時の対応について改めて整理しております。

ヒグマ情報を収集し、それをさらに集約、評価し、それに基づいてリスク評価を行い、

注意喚起を行うとともに、登山口の閉鎖も含めた対応をすることとしております。

3 ページをご覧ください。

ヒグマ情報の収集、把握についてです。

これまでは登山者向けのヒグマ目撃アンケートを取っていますが、これを継続し、特に危険事案や問題個体に関しては迅速な情報提供を呼びかけて、電話で報告していただく、或いは自然センターに寄って報告していただくということをしっかりとお願いをしていきたいと思っております。

また、新しい手法として、デジタルでの情報収集の在り方を検討中です。

続いて、4 ページをご覧ください。

ヒグマの行動段階やリスクに応じた対応方針の意思決定手順の明確化です。

ヒグマの情報を収集し、それが危険な事案、異常な事態なのかどうかを把握し、ヒグマの行動段階で評価できる場合は行動段階で評価し、情報が不十分な場合は情報収集や現地調査の上でリスク評価を行い、知床ヒグマ対策連絡会議としての対応を予定しております。

続いて、5 ページをご覧ください。

ヒグマの行動段階判断の見直しです。

これはヒグマ管理計画の中でも既にある考え方ですけれども、ヒグマの行動に照らして、段階0 から段階1、段階1+、段階2、段階3 と、問題行動が多いところを高い数字で評価しています。具体的には、人につきまとう、攻撃する個体は段階3 としていますが、人身被害を及ぼした、または及ぼすおそれの高い個体も段階3 として捕獲等の対応をするということで修正しております。

続いて、6 ページと7 ページをご覧ください。

知床半島ヒグマ管理計画では、以前からゾーニングという考え方がありまして、ゾーニングと先ほどの行動段階区分の組合せによる管理の方策が定められております。

これまで登山道はゾーン2 という区分でした。ゾーン2 は、人身や経済へのリスクが低く、熊への許容度が大、利用者責任が大という場所として整理してきました。

ゾーン2 につきましては、市外地のゾーンとは違い、通常、ヒグマがいる場所です。表の中の対ヒグマに関しては、その場所とヒグマの行動段階の組合せによって、経過観察をするのか、追い払いをするのか、捕獲するのかが記載されております。対人間としては、注意喚起、利用自粛のほか、利用自粛または入り口の閉鎖という考え方が追加されております。

7 ページでは、今回、登山道という区分を別に定めております。

基本的に登山道は自由使用に供している場所ですので、登山、トレッキング等の利用者が比較的多い遺産地域の登山道という区分になります。この場所は、段階2 や段階3 の問題個体については捕獲するという考え方ですが、それに対応する形で、対人間につきましては、行動段階2 や段階3 の問題個体が出ましたら、登山口の閉鎖ということを明記しております。また、問題行動が見られる段階1+ の場合は、注意喚起または利用自粛要請と

いうことで整理しております。

続いて、8ページをご覧ください。

これまでも、ヒグマが出ました、注意してくださいという情報は出していましたが、さらに危機感と行動変容を促せるようにリスク区分を表示するものです。

この表にありますように、通常、注意、警戒、極めて危険という表示を出すことによって利用者に対して危機感が伝わるように整理しております。

あわせて、登山者の行動への助言も整理しております。例えば、リスク区分3の警戒の場合は利用自粛の要請になりますが、こういった場合の行動への助言としましては、人を恐れず、避けない危険なヒグマが当該コースで確認されています、事例の詳細を確認し、リスクを軽減する準備や行動を取ってください、リスクが受容できない場合は計画の中止、変更を検討してくださいというように、行動変容を促すような言葉を情報発信して注意喚起していきたいと考えております。

次に、9ページをご覧ください。

こちらを各コースで共有しながら出して、分かりやすく情報提供していきたいと考えております。

続いて、10ページをご覧ください。

リスク評価をしたものがしっかり伝わるように、登山口で注意喚起ボードを設置することを考えております。リスク評価によって色や数字を変えて表示してありまして、それを見て判断していただく形にしたいと考えております。

注意喚起ボードは、岩尾別の登山口、羅臼温泉登山口、硫黄山からの登山口、羅臼湖の入り口に各関係機関で役割分担をしながら整理する方向で進めているところです。

続いて、11ページをご覧ください。

行動段階2以上の問題個体が出た場合に登山口の閉鎖を明記しましたが、閉鎖したら、どう解除するのかをこのフローで整理しております。

まず、こうした事案が発生した場合は、登山口を閉鎖しまして、その問題個体を捕獲する体制で山に入るのですけれども、捕獲できた場合は登山口の解除ができるわけなのですけれども、捕獲ができないことも考えられます。その場合には、まず5日間以上の閉鎖を継続した上、追加的な情報を収集しまして、その状況に応じて、捕獲に至らなくても解除することを考えております。

その場合については、リスク評価は「極めて危険な状態」から「警戒」となるのですけれども、先ほどのリスク評価の表示のとおり、リスクがあること認識してくださいということをしかりと伝えた上で解除していくというように整理しております。

最後に、体系図にお戻りください。

一番下段の再発防止策の右側の問題個体発生抑制については、これまでも様々な方法で来訪者がヒグマに近づかないよう啓発や注意を行ってきておりますし、あわせて自然公園法の改正もあり指導してきているところですが、まだ十分ではないということで、これら

の対策を強化して、問題個体の発生抑制に関係機関で取り組んでまいりたいと思っております。

以上が再発防止策の内容です。

●北海道（島村） ただいまの報告に関しまして、本日ご参加の皆様には、3月10日の適正利用・エコツーリズムワーキンググループ及び検討会議でも様々なご意見やご提案を頂戴しました。ありがとうございます。

多くの段階を経たために時間がかかってしまいましたが、再発防止策の方向性につきましては、この会議での確認をもってご了承頂き、次は実行のフェーズに移っていくことになります。最初の出だしが重要であることはもちろん認識しておりますけれども、新たな取組のため、対策を進めていく中で課題が生じてくれば、その都度、関係機関で協議、検討して、最善と思われる対策を速やかに実行していくという臨機応変な対応も必要だと考えております。

地域の皆様からのご意見を取り入れ、また、普及啓発という面では地域の皆様にご協力をいただきながら、まずは対策を進めてまいりたいと考えておりますので、引き続きご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、先日の検討会議でもご意見やご提案を多々頂戴しましたけれども、再発防止策の確認にあたりまして各機関からご発言を頂戴できればと考えております。

まず、前回の11月の地域連絡会議の際に、知床斜里町観光協会の新村様には、知床のマイナスイメージが先行してしまうと、今後、様々な影響が出てくるという懸念についてのご意見をいただきました。また、情報発信、周知の活動をしていきたいという点のほか、ヒグマの生息地であることを観光で訪れる方々にもきちんと理解していただくことも必要だというお話を頂戴しました。

今回、登山者への情報提供ということで様々な対策を検討してきましたが、この部分につきましては、観光協会様にも改めてご協力をお願いしたいと考えております。

本日は、知床羅臼町観光協会様からもご出席をいただいておりますので、知床羅臼町観光協会様から、情報発信や今後の注意喚起、普及啓発などにつきましてご発言を頂戴できればと考えております。

●知床羅臼町観光協会（和久井） 知床羅臼町観光協会の和久井です。よろしくお願いいたします。

回を追うごとにすごくよい方向に向かっていると思うのですが、情報発信に関して、これでいいということはないと思うのです。具体的にどうすればいいのかと言われると、今後も情報発信に関しては、し過ぎるぐらいでいいと思うのです。こちらを皆さんで検討していただければと思います。よろしくお願いいたします。

●北海道（島村） 普及啓発という点では、行政機関だけではなく、観光協会さんの力は大変大きいものと考えております。この後、具体的に詳細の対策が決まっていますが、その際には改めてご協力をお願いしたいと思います。

続きまして、知床ガイド協議会様からは、適正利用・エコツーリズムワーキンググループの委員でもある松田様にウェブでご参加いただいております。

前回、11月の連絡会議に出席していただいた岡崎様からは、気候変動の懸念もさることながら、クマ対策は人間対策だというご発言をいただいたところがございます。また、若いガイドがどんどん増えてきておりますので、クマのことだけではなく、知床のことを教育していきたいといったご意見も頂戴しました。

ガイドの皆さんは、直接、道外を含め、様々なお客様にご対応されると思いますので、ぜひその活動の中でお客様に様々なことを広めていただければと思いますが、そのほか、本日の会議でご助言をいただけるような点がございましたらお伺いしたいと思います。例えば、今後のヒグマ事故の防止という観点から、若いガイドの教育面でどのような活動を予定されていくのかなども踏まえてご発言をいただければと思います。

●知床ガイド協議会（松田） 知床ガイド協議会で知床ネイチャーオフィスの松田と申します。よろしくお願いたします。

本日、会場に行けなくてすみません。

今、ガイドの教育で具体的なものがあればとおっしゃられたのですが、まだ具体的なものは決まっています。今後、いろいろなことに取り組んでいく上で、今、ガイド協議会は任意団体ですので、法人格を取ってもう少し組織体制を充実させて、どういった教育活動を行うかを検討していくという段階です。

●北海道（島村） まさにこれからが大変重要な時期に差し掛かると思います。運用を進めていく上で課題などが発生しました際には、地域一丸となつての対策が必要となつていくと考えておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

続きまして、ウトロ地域協議会様からもご発言をいただければと思っております。

桜井様から、前回の会議で、ヒグマの目撃スポットに直接標識などを設置してはどうかという具体的な提案を頂戴しましたが、3月10日のエコツーリズム検討会議では、ガイド協議会の滝澤副会長様から「特に岩尾別コースについては標識や看板が多過ぎる」といった現場の声も踏まえ、各登山口に設置する情報発信の内容の充実強化を検討しているところではあります。

知床へ来られる方への普及啓発の取組のほか、地域で暮らす住民の方々への普及啓発といった視点も大変重要だと考えておまして、そういった中、ウトロ地域協議会の皆さんの果たす役割も大きいと感じております。

今回の事故を踏まえ、協議会の皆様から、ご協力をいただける事項などがございました

らご発言いただければと思います。

●ウトロ地域協議会（桜井）　ウトロ地域協議会の事務局をしております桜井です。

今のお話の前に、事故が起こるような要因のある場所を歩く人たちへの直接的な注意喚起は必要だと思っています。同時に、看板がいっぱいあるという話も伺いました。看板と注意喚起は、恐らく全然趣旨の違うものだと私は思っております。どこかにありました発信のデザインという中では、危険な部分、そして、それがずっとつけっ放しではない、さきの評価のときの会議でも提案したのですけれども、季節に応じて、リスクが高くなる季節、あるいは、期間がございます。それは、植生、あるいは、そこにいる昆虫、そのほかのものを含めて、ずっとそこに誘引するものがあるということはないわけですから、それをウトロから岩尾別の登山道の中でそういった区別をすることは必要ではないかと思っています。

同時に、登山道の看板は必要だと思いますし、道に迷う、登山を見失ってしまうことがないように喚起する看板は、せっかくつくったのだから、これからもなくならないと思うのですけれども、その使い分けは、環境省などで登山道を管理する中でもう一度見直すことも必要なのかもしれない。

そういった中、入り口のところにある大きな看板の中にクマの目撃情報がありましたと出ていても、地元の方は違いますけれども、初めて来た、あるいは、何回かしか来ていない人は、登山するときにその場所をイメージできないと思います。私がよその山に行ったときにも同じような経験があります。

それが全てではありませんが、危険な個体の目撃があったときには、現場を歩くときに、昨日ここで目撃情報があったということが分かることが必要なのかもしれないと思っています。

また、地域でできることについては、なかなか難しい課題だと思います。知床地域では、地域の生活の中で、ヒグマと人との共生、あるいは、誘引しない取組をふだんの生活の中からずっと守ってきているのです。それはかなりシビアだと思います。

時に、それを逸脱する人たちもいますけれども、実際に地域の人たちの取組は、ヒグマがいて嫌だ、ヒグマが怖いからということではなく、何とか折り合いをつけながら暮らしていこうという取組です。私が暮らし始めてから40年近くがたつのですけれども、ずっと脈々と続けられてきています。

今回の人身事故、あるいは、これからも発生してくる問題個体という部分に関しての地域の取組は、これからも粛々と続けていくということはしっかりと確認できますし、知床で暮らす人たちは、そういった環境自体が地域のすばらしい資源だと十分に承知していると思います。

ぜひ、専門家の方々だけではなく、地域の人たちと一緒にやっていき、声を拾うことは大事だと思いますので、そういった場をたくさんつくっていただければと思います。

それから、資料4-1のヒグマ人身事故再発防止の体系について質問です。

最初の委員会の報告にもあったのですが、岩尾別川の遡上に来るヒグマの個体が危険だということは、地域ではずっと思っていました、岩尾別川にどうしてヒグマが集まってくるのでしょうか。

昨年は本当に少なかったという話を聞きましたが、ここに遡上してくるカラフトマス、サケは、ふだんはほとんど見ることができず、手前のふ化場の管理の中で上に魚道をつかって上げてしまうという話で、クマが出てくる、出てこないというのがあると。今、どうなっているかは分からないのですが、数年前のシャトルバスの話などがあつたときにはその話がよく出ていました。

結局、魚を自然遡上させる仕組みはどういうふうになっていて、その辺とヒグマの管理がしっかりと連携できているのかというのが、3月10日の後にいただいた資料を何人かの方に見てもらったときに発せられた疑問です。

要するに、ヒグマがいるからマナーの悪いカメラマンが来る、では、どうしてヒグマがいるのか、そこまで動きをコントロールするのであれば、そういう危険な状態をつくらない環境をコントロールすることができないのかという質問もございましたので、そこを伺いたいです。そういうことは可能なのでしょうか。

●知床分室（三井） 最後のご発言については、今後の中長期的な対応の一つということでご理解いただければと思いますが、今回は登山道に関する再発防止策に特化した資料になっております。

●知床財団（玉置） 知床財団の玉置と申します。

今、桜井さんのご発言に岩尾別川の話があつたのですが、私の理解としては、岩尾別川に魚を上げることがむしろ世界遺産の価値ではないかと思うのです。

これまで、砂防ダムのほか、林野庁がダムを改修していますし、財団としても、斜里町としても、魚道をつくっているのは、あそこに魚を上げて、むしろ森の恵みなどに合わせていくために、クマが来るというのは自然な状態なので、科学委員会や河川工作物のワーキングでも、むしろそこは人間がどうすべきかをコントロールすべきだ、そこが価値だ、そこをどうするかという議論がありました。

今回は、事故なので、見せる見せないという議論はできないと思うのですが、そこにつなげていくべきところなのかと思います。逆に、自然をコントロールするというよりは、むしろコントロールできないものなので、人間側をコントロールし、いかによりよい形で見せていくかだと思います。

今は、ただ単にクマが来ているのを漏らしているというか、見せたくはないけれども、見せてしまっているような状況なので、こう言うと観光利用みたいになってしまうのですが、いかに資源としてうまく見せていくか、よりよい体験をさせていくかがむしろ重要で

はないかと私は理解していました。

●北海道（島村） 本日、羅臼漁協様からもご出席をいただいております。

前回の会議では、任田様から、クマ対策について、町内会で草刈りを行う、ごみは収集日当日に出す、魚の干し方にも気をつけるなど、うまく共存していく方法を住民として考えて暮らしているというご発言がありました。また、クマの捕獲について、SNSでの情報拡散に気をつけなければならないというご提案もいただきました。

改めて、本日の会議を踏まえてご発言をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

●羅臼漁協（菊池） 羅臼漁協の菊池です。

羅臼町に防災無線などで周知していただいておりますので、住民として羅臼町には感謝しているところです。漁民としては、熊の出没などについて、町の防災無線で夜はなるべく魚を干さないようにしてくださいなどの積極的な指導にも協力していただいておりますので、非常に満足しています。

●北海道（島村） 続きまして、今日は斜里山岳会様にもオブザーバーとしてご参加をいただいております。

山岳会の皆様のご意見やご協力は今後の対策の肝になると考えております。本日、お忙しい中、ご参加をいただいているわけですがけれども、山岳会の皆様の視点で、今後、対策の運用を進めていく中でのアドバイス、もしくは、ご協力をいただけることがございましたらご発言を頂戴できればと思います。

●斜里山岳会（滝澤） 斜里山岳会の滝澤です。

まず、先ほどのウトロ地域協議会の桜井さんのお話にあった看板に関することについてです。

資料4-3の3ページの右下の登山口にある看板をご覧ください。

ごちゃごちゃですね。看板が多過ぎます。この下の手前の下側にあるところにヒグマに警戒という赤い枠で黄色い文字のものがあって、本当はこれを見せたかったはずですが。これを見てもらいたかった、でも見落とされたのはなぜか。それを今回の対策で改善されるということで、大いに期待しています。

看板は、現在、施設管理等運営協議会の中に入っておりますけれども、それ以前は、羅臼岳登山道部会というものがあって、関係機関で協議していく中で、この看板を整理することに当たって、いろいろな啓発などの看板はまとめてしまおうということになりました。今、この写真にある看板の中にも、警察や林野庁の安全登山に関する啓発など、貼りっ放しにしていいものも含まれているわけです。そういうものがたくさん貼られてしまうと、本当に必要な情報が見落とされてしまうから、フリーのスペースを広く取って情報掲示板

として機能させようということで整理したのです。しかし、結局、貼りっ放しにしてい情報だけが残って、そのときに一番見てほしい情報が枠の中に入らずに見づらい位置に貼られているというオチでした。

桜井さんが言っていた登山道に季節ごとに看板を置くということについては、一連の会議の中で斜里山岳会の山中副会長から、以前、560メートル岩峰、650メートル岩峰にアリの巣注意という看板を設置していたという話をしており、また、それに対する啓発は進んでおりますので、山岳会も反対はしておりません。

看板をつけることに対する考え方について、斜里山岳会の考えを語らせていただきました。

この会議に出て、ある意味、初めて分かったのですけれども、登山道に関するいろいろな決めごとを3月に発表しますと言われていたのですが、この地域連絡会議ありきのタイムスケジュールだったということでよろしいのでしょうか。

それだったら、山岳遭難として考えた場合、危機意識がないのではないですか。同じような事故が、確かに、知床地区の羅臼岳で起こった事故で、羅臼岳、知床連山のほうの事故でもあるけれども、ヒグマに関する事故という意味では、北海道中のどこでも起き得ます。そういう中でいろいろな対策を講じなければいけないのに、割と早い時期に3月に発表しますと言っていました。3月になったら出てくるのかなと思ったら、今日の段階でも何もなく、アウトラインはこれから決めますと、えっ、これまでと同じことを言っていないかと思いました。ちょっと危機意識がないのではないかと私自身はかなりがっかりしているところです。

3月に入ってからアウトラインを示していただいて、それに対して、検討会議の中でお話はさせていただきました。ただ、あくまでもこれから決めますというものに対してこういうものがいいよねということが言えないような状況だったのに、ここに来て、これから決めていきますというのは、タイムスケジュール、ロードマップが遅過ぎです。

これは登山者だけの話ではないです。登山するために来る人は、地域の宿泊施設も使えば交通機関も使うのです。登山者と登山を取り巻く産業に関わるものへの影響に関してあまりにも過小評価し過ぎではないでしょうか。何せ、遅過ぎです。そして、今、ここに至ってもまだ何も見えてきません。

我々が知りたいのは、いつから利用できるのか、どのような利用の仕方になるのか、どうすれば利用できるのかなのですけれども、今、まだ何も出ていません。3月になったら出てくるものだみんな期待していたわけです。でも、これから決めますということですね。

ここまで時間をかけて詰めるのは、行政のほうからしたら、ある意味、当たり前かもしれないけれども、でも、繰り返しになりますけれども、遅過ぎますよね。

登山は、今日考えて明日登ることができるのは地元の間人間だけで、多くの方は、遠くから飛行機に乗って来るわけです。そうなると、宿も取らなければならないので、半年も前

から準備して来るものなのです。7月の山に登りたかったら、1月から計画を立てて飛行機や宿を予約しようとしているのです。

個人のお客様でもそうですから、旅行代理店に至っては、11月には商品をつくって3月には夏の商品を売り出し、4月から集客しなければなりません。そういう状態にあるのに、今年はできていないわけです。明らかな羅臼岳外しが行われています。

おまけに、今年に関して言えば、雌阿寒岳も噴火していて、6合目までしか行けないので、道東の山に入ってくる人間は大きく減るでしょう。

それでもなお、登山者の絶対数が少ないから影響は少ないという評価をしてしまうのかどうかです。そうではないと思いますし、ちゃんと分析をしていただきたいです。その上で、スピーディーな対応をしてほしいです。

ここまで話をして、骨子しか決まっていなくて、これから決めるのだと言ったら、夏のシーズンまであと何か月ですか。何日というところまで来ています。ここまで来てしまったのはしょうがないです。ここからいかにスピードを上げるかです。

先ほども言いましたけれども、登山者が知りたいことは何も出てきていません。これまでと何が違うのか、どうすればいいのか、どこに連絡すればいいのかという部分の比較すらありません。それがあれば話は変わったでしょう。これまでと比べてどうかという部分があるかないかで全然違ったと思います。

これからやるのであれば、よろしくお願ひしたいと思います。

今日以降、いろいろなところに情報を出せるかと言われたら、まだ何も決まっていませんとしか言えません。山岳会としては、日本中のいろいろな山岳団体、組織としては日本山岳・スポーツクライミング連盟、日本勤労者山岳連盟、日本山岳会、日本山岳ガイド協会などとのコネクションもありますが、そういうところにどういう情報を出せばいいのか。協力はしますけれども、これでは何も出せません。登山者に関するケアというか、利用者目線に何も立っていません。これでは駄目です。スピーディーによろしくお願いいたします。

それから、山岳会からの発言の機会の一つしかないと思うのですけれども、これまでも、8月14日の事故以降、そして、来シーズンも、登山口で登山者を見守らなければならない四井さんの話もぜひお聞きください。よろしくお願いいたします。

●斜里山岳会（四井） 私は、網走山岳会ですが、登山道の入り口にある木下小屋の管理人ということで参加させていただいております。

今、滝澤さんが言ったとおり、登山しに来るなど決めるなら、それはそれでいいと思うのだけれども、登山をしてねというスタンスですよね。そうすると、情報提供がすごく大事だと思うのです。

僕はスマホを持つのがすごく遅かったのですけれども、今、通信機器をほとんどの人が持っていますよね。例えば、去年から入林簿をスマホで読み取って出してもらっていますが、スマホを持っていない人はどうするのでしょうか。また、登山道の入り口の地の涯ホ

テルさんが営業すれば、発電機を回してくれて、地の涯ホテルさんの内部に通信基地局ができるのです。しかし、電力がないとアンテナ基地ができません。幾らウェブで登山道の入り口でQRコードを読み込んでと言っても、読み込めません。

具体的に、ロープを外すか、再開するか、今日の段階でまだ決まっていなくても、再開するときにセットで通信基地局が生きないと、今、いろいろな対策があるけれども、全く意味がありません。

去年のあの事故も、同行者の方がたまたまスマホを持っていて、去年の6月20日ぐらいに、どこから発電機を持ってきたのかは私は分からないのですけれども、発電機が生きていたから、登山道から警察に連絡できたはずですよ。

安全登山というのは、デジタルの時代だから、通信機器をすごく大事にされているし、当てにしていると思います。今、登山をする方で地図を持ってきて読む人なんていません。ほとんどがスマホで地図を見て下を向いて歩いているのです。そうすると、倒木とは言わないのだけれども、登山道に倒れかかっている木、昼間の遭難は起きないし、起きてほしくないのだけれども、登山道の木に頭をぶつけてこけて手の骨を折った人もいますし、頭が血だらけで下りてきて、どうしたのと聞いたら、頭をぶつけてしまったという人もいました。そういうこともあるから、登山道の整備も将来的には考えてほしいです。

また、問題個体が出たときになるべく早くパトロールして捕獲できればいいけれども、もし捕獲できなかった場合、登山道が閉鎖になるのですよね。5日以上閉鎖継続となっています。では、そのときにうちの小屋に泊まったお客さんに誰が連絡するのですか。今、来ても登れませんよと。予約を取ったのだから、私のほうで連絡してくださいと言われても、ご存じだと思いますが、去年から小屋の利用客は激減しています。例年ですと、3月ぐらいになると予約の件数が四、五十件あるのですが、今のところは5件だけです。それに対して、予約を取るときに、こういう問題が起きたから登山道が閉鎖になる可能性もゼロではないと案内しているけれども、直近で登山道が閉鎖になったら、それは諦めてとなるかもしれませんが、2日後、3日後のお客さんに連絡する体制も考えていただきたいです。

●北海道（島村） ただいまのご指摘に対して、事務局から説明をお願いします。

●知床分室（三井） まず、いつから利用できるかというお話につきましては、7月からの再開を目標として各関係機関で準備しているところです。

恐らく、今、準備していて、その期間のマックスが7月だと考えていたのですけれども、なぜ7月なのか、他の関係機関から補足をお願いいたします。

●斜里町（塩） 斜里町環境課の塩です。

今年度、ヒグマ対策連絡会議の事務局を斜里町が持っていますので、私から発言させて

いただきます。

今、事務局の三井さんからのご発言があったように、ヒグマ対策連絡会議で今回の事故の対策を議論している最中です。今、発言があったように、今回、この場で方向性が決まり、その後、具体的な対策を進めるということで、目標としては7月の再開を目途に、今日この場で合意が得られたら実際に動き出すこととなります。いろいろな対策を打って、それがある程度整った段階で開けるという判断を我々でしておりまして、そのリミットが今のところは7月です。

具体的な日程は定まっておりませんが、目途として、毎年やられている7月の山開きまでには何とかその対策を一通り終えたいと考えております。

対策について、滝澤さんも、四井さんも、桜井さんもおっしゃっていたように、情報提供は我々も重要だと思っていますので、いかに登る人に分かりやすく情報を提供し、そのリスクやクマがいることについてちゃんと届けることが重要だと思っていますので、その取組についても進めて、一通りの取組を7月上旬までに何とか終えたいというのが現状です。

それに向けて、ヒグマ対策連絡会議にはいろいろな省庁がおりますので、各々の対策を進めているというのが現状です。

ですから、今日この場で合意をいただければ、先ほど滝澤さんがおっしゃっていたように、スピード感を持って進めていければと思います。

●北海道（島村） 環境省から何かありませんか。

●環境省（渡邊） 今、連絡会議の事務局からあったとおりで、我々も登山口の看板や登山者向けのホームページの作成に取り組むこととしています。しっかりと取り組んでまいりたいと思っています。

●林野庁（長崎） 北海道森林環境局の長崎です。

今、斜里町の塩課長がおっしゃられたとおり、うちも準備を含めて対応していますので、よろしく願いいたします。

●斜里山岳会（滝澤） 7月がリミットと言っていたので、状況によっては前倒しされるのだろうという期待はしています。しかし、先ほど言ったとおり、登山者と登山者に関わる産業についての理解が薄いのではないですか。

ヒグマに関して被害が出たとき、農業に関してだったら農業被害を調べますよね。今回の事故に関して、観光に対する影響、被害は調べていますか。この会議での聞き取りはされているけれども、多分、数字的には本当に少ないでしょう。でも、きっとこれから効いてきますよ。

何しろ、去年、8月14日以降に登りたかった人は、実は、私は、今日は山岳会として来ていますけれども、登山ガイドをしていて、お客さんを受け入れているのですが、ほとんどが6月です。去年は登れなかったから、さっさと登りたいのです。もう予約してくれている方がいます。

ただ、例年、この時期、3月の末になったら夏のシーズンの40%程度の予約が入るけれども、今年はまだ30%も埋まっていません。先ほどの木下小屋ほどではないにしても、影響は出ているのです。

施設管理等運営協議会の総会を先日行いましたね。そこで、6月の登山者の入り込み数が伸びてきているわけです。これまで、いろいろなワーキング会議でも環境が変わったということが言われていますよね。その中で、雨のタイミングや気象条件が変わってきていて、登山道を取り巻く状況も変わってきています。そして、直接的には雪解けが早く終わって、登山者がアイゼンやピッケルなしでも歩ける時期が前倒しになってきているのです。

コロナ禍明け以降、特にコロナの時期あたりから個人の登山者の装備の軽量化など、スピーディーに登れる道具が一気に普及したことで6月の登山者が増えているわけです。それを無視して7月に設定している段階で、登山者のことは何も考えていません。何ですか、これは。こんな議論をここまでしてきて、まだ決まっていなくて、なおさら7月です。

山岳会に対して意見をここまで聞きましたと言われたけれども、その中で、6月の頃、なるべく早いうちにといいことは言わせていただいております。というのは、登山口というのは1か所ではなくてつながっているのです。岩尾別の登山口、羅臼温泉登山口、硫黄山登山口は全てつながっているのです。これを全て岩尾別の登山口の山開きに結びつけるようなばかな発想はやめてください。

この連絡会議に合わせてロードマップをつくったのかと言ったのと同じで、山開きでいだろうぐらいの気持ちでつくったのではないかと、はっきり言って憤っています。山開きの主催者は観光協会と斜里山岳会ですよ。では、我々が山開きを前倒ししますと言ったらどうするのですか。6月1日にしますね、これでオーケーになるのですか。違うでしょう。

興奮してしまいましたが、それぐらい憤っているということをご理解ください。

それから、先ほど、登山口の電波状況について四井さんから話がありました。

QRコードを利用してというのは、私から施設管理等運営協議会の中で提案したものです。入林者名簿が廃止になる代わりに、今、オンラインで登山計画書を提出できるようになっていて、アルプスや八ヶ岳など、本州の山ではそれが普通になってきているので、QRコードを積極的に活用してはいかがかとこちらから提案しました。

ところが、岩尾別登山口においては、ホテル地の涯さんの営業がされないことで電源の供給ができずに電波がなくなるという事態が生じて、去年はほかの手段で何とかしたということです。岩尾別はいいけれども、ほかの登山口の電波状況を確認されていますか。羅臼温泉登山口、硫黄山登山口、羅臼湖、どこも電波は通じないですよ。

ここに書いているのは、今の状況だと絵に描いた餅なのです。食べる餅をください。よろしくをお願いします。

●北海道（島村） ただいまの電波の関係ですが、説明できる方はいらっしゃいますか。

●環境省（岡野） ご指摘をありがとうございます。電波の状況については我々も把握していて、登山口では通じないということです。そのために、基本的にはアナログ的な対応ということで看板をしっかりと出すことにしています。同時に、登山届については、出発時に出していただくことを強く求めるということで、登山利用者への情報提供を行っています。

登山を計画された段階、あるいは、移動する前の段階、途中の段階に登山届を出していただけるよう働きかけ、途中で登山道の状況も把握していただいて、最終的に入り口ではアナログで提供するという組合せを今の状況に合わせて整理しているところです。今の分析を考えながら対策を検討しているところです。

今後の再発防止のための対策は、このような事故を二度と起こさないために欠かすことができないものだと考えております。そういった意味では、十分な対策が取れないまま閉鎖解除をすることは難しいと思っております。ただ、そういった準備が予定よりも早く整えば、前倒しすることはぜひ考えていきたいと思っております。

●北海道（島村） 山岳会の皆様におかれましては、今後も引き続き、様々なご助言をいただければと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

続きまして、知床財団様からご発言をお願いできればと思います。

知床財団様は、地域と行政機関をつなぐ重要な役割を日頃から担っていただいておりますし、様々な面でご協力をいただいております。

今後の対策の実動部隊としてのご負担も大きいものと考えておりますが、改めて、今日の皆様のご発言などを踏まえてご発言をいただければと思います。

●知床財団（玉置） 知床財団の玉置でございます。

我々は、この間、ヒグマ対策連絡会議の一員として、事故直後の対応や再発防止策に向けた会議、協議対応については、財団独自の財源で対応してきております。

これから新年度となって、先ほどもありましたが、新たに進めていく対策として、どのように事故をなくしていくのかを考えております。これは、ここにいらっしゃる皆様もそうですし、我々も不断の努力が必要だろうと思っております。

我々知床財団は、知床半島をホームグラウンドとする実動部隊として現地の対策を進めていくこととなります。これは、行政機関の皆さんに向けてですが、皆さんのお力添えや予算、事業費などがなければ進まないと考えておりますので、改めて、新しい事業の事業

化や関係する予算の獲得などにご尽力をお願いいたします。

もう一つは、中長期対策に向けての実行体制ですが、誰が何をやるのかは、ヒグマ対策連絡会議の中でも決めかねております。

シーズンがこれから始まりますので、中長期ですが、早いうちに実施体制を固めていく必要があると思います。知床財団としても、先ほども言いましたが、ヒグマ人身事故を起こさない体制づくりを進めていきますけれども、時間がかかる対策については、早めに始動して、実行体制を早めに協議して整えていただきたいと思っております。

●北海道（島村） 本日、この場で話し合われた対策につきましては、皆様の協力はもちろんのこと、ここにご参加の皆様には今後もそれぞれのお立場でご協力をいただければ幸いです。

また、今日、会場にお越しいただいている皆様から一通りご発言をいただきましたが、オンラインでご出席の皆様からご発言はございませんか。

（意見なし）

●北海道（島村） ないようですので、本日の会議をもって再発防止策の方向性については決定させていただきます。

今後は、先ほど対応が遅いという厳しいご指摘もありましたが、次の実行というフェーズに進んでまいりたいと思います。ねじを巻いて進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

それでは、次の議事に移ります。

議事（5）のその他ですが、まず、事務局より令和8年度に予定しております知床岬地区の仕切り柵補修・新設工事の概要について説明いたします。

●環境省（渡邊） 環境省の渡邊です。

資料5に基づいてご説明させていただきます。

タイトルにありますとおり、エゾシカワーキンググループの結果報告の中でもお伝えしておりましたが、残念ながら、知床岬の先端部ではシカの密度が急速に上がってきております。資料5の中段にありますとおり、生息密度が1平方キロメートル当たり1頭だったのが今は145頭と大幅に増えてしまっておりまして、エゾシカワーキンググループの中でも、ここは早急に対策しなければならないというアドバイスをいただいているところです。

それを受けて、来年度の冬に巻狩りを実施したいということで、それに向けて、既存のシカ柵に加え、新しいシカ柵を来年度中につくる予定としております。

具体的には、次のページの別紙にありますとおり、赤い線で示されているのが既存の仕切り柵、紫色と緑色が新しくつくる仕切り柵となります。

その作業自体は、猛禽類の育雛期を避けた8月以降に現地で作業を開始し、冬の巻狩り

の前の10月までに終わらせる予定としております。

既存のシカ柵についても、穴が空いていたり、倒木の影響でシカが通れるようになっていたりしますので、そこにありますとおり、文吉湾に船で資材を運び、そこから各場所にヘリを飛ばして下ろして10月までに終わらせる予定としております。

なお、土地の所有者である森林管理局とも調整させていただきながら、文吉湾については具体的に決まったときに漁協の方にご説明させていただいて、10月までに工事を完了して冬の巻狩りを実施したいと思っております。

環境省からの説明は以上です。

●北海道（島村） ただいまの報告に関しまして、ご質問等はありませんか。

（意見なし）

●北海道（島村） それでは、次の議題に移ります。

前回、11月の地域連絡会議で、ウトロ地域協議会の桜井事務局長からございました知床峠のトイレのスロープへのご指摘がありました。その後、根室振興局で対応を検討しておりますので、その進捗状況について振興局から説明いたします。

●根室振興局（浅井） 根室振興局環境生活課長の浅井と申します。

私から、知床峠のトイレのスロープについてご説明させていただきます。

まず、トイレのスロープの固定的な設置については、来年度、令和8年度に設計を行い、令和9年度に施工する予定としております。ただ、令和8年度も利用できるようなことで、仮設スロープの設置も検討しております。

こちらにつきましては、安全性の確保も必ず必要になりますので、工事事業者とともに、雪解けとともに現地の状況を確認し、実際の施工の可能性について探ってまいりまして、仮設の設置を検討しております。

●北海道（島村） 桜井様から今のご説明について何かございませんか。

●ウトロ地域協議会（桜井） 設計は今年度で実施は令和9年度ということでびっくりしたのですが、仮設のスロープを設置していただけるということで安心しました。ありがとうございます。

●北海道（島村） 作業の進捗状況についてはまたお伝えしていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

事務局からの説明は一通り終了しましたが、皆様から何かご発言はございませんか。

●ウトロ地域協議会（桜井） これまでも、この協議会あるいはエコツーリズム検討会議

で、世界自然遺産に関わることで言うと、6年ぐらい前から必要ではないかというお願いをしてきました。

遺産地域エリアの植生のしっかりとした調査、モニタリングが必要ということをウトロ地域協議会前理事の松本さんや委員の方々がずっと言ってきました。さきのエコツーリズム検討会議の中でお話をさせていただきましたが、石川先生は、植生に関しては、エゾシカワーキンググループの中で取り上げていることとおっしゃっていたのです。

確かに、これまでのエゾシカワーキンググループの中での取組を見ましたら、植生の保護と書いていたのですけれども、世界自然遺産に登録された一つの中に生態系という部分がございます。どちらかという、気持ちは哺乳類や爬虫類に行くのですけれども、生態系というのは全体を網羅してサイクルするというのを考えましたら、この知床半島の植生状態がどういうふうになっていくかという変化は、気候の変化にも起因するところがあると思うのですが、残念ながら、以前、五湖の遊歩道を改修するときにも、植生保護のためには言いながら、過去にどんな植生があって、今はどうなのかという変化がきちんとモニタリングされていませんでした。かつてはここにあった植物がなくなってしまっている、あるいは、ほかの外来植物が繁茂しているのではないのでしょうか。

先のエコツーの中でも、羅臼の長谷川さんが何回もおっしゃっていることですが、今回、エゾシカの柵を設置するに当たっても、知床岬の本来の植生を取り戻すということは私も不可能だと思います。でも、指摘されるように、特定外来種に指定されているオオハンゴンソウ、あるいは、アラゲハンゴンソウの類が知床岬で繁茂してきれいに咲いているという話を聞きましたら、問題ではないかと思っています。

とにかくオオワシやオジロワシ、ヒグマなどに目が行きがちですが、私たちを含めて、植物は非常に重要だと思いますし、植物だけではなく、それに起因する土壌の変化も非常に大きな問題だということは世界各国でも指摘されていることです。

たしか、石川先生は、20年か30年ぐらい前に知床半島の植生図を作成されています。それ以降、そういった明確な植生図は私は見ていませんので、それがどういう形でつながるかということはあると思うのですけれども、ぜひしっかりと調査、そして、変化を調べていくことが必要ではないかと思うので、もう一度、こういったものを調べるための科学委員会あるいはワーキンググループの設置をお願いしていきたいと思っています。

●環境省（渡邊） 石川先生からもお話があったということですが、世界遺産の関係では、モニタリング計画を立てていまして、その中の一つに知床半島全域における植生の推移の把握（森林植生、海岸植生、高山植生）というモニタリング項目がありまして、そこを担当しているのがエゾシカワーキングです。知床半島全域に設定している調査区において植生調査を実施し、評価しているということで、その結果を受けて対策を立てるという順応的管理に基づいてやらせていただいております。

●ウトロ地域協議会（桜井） 今、渡邊さんが説明していただいたことは、何年か前からずっと同じ回答をいただいていますけれども、全然ウエイトがかかっていません。そして、実際に地域で暮らす人たちにとっての大きな変化を危惧しています。別に、それがあからとって私たちの生活自体が変わるものではないですけれども、地域にとって、斜里町も羅臼町も、世界自然遺産に登録されていることが一つの大きな誇りなのです。そこに私たちは産業として入って暮らしております。その変化がやはり気になるのです。そして、それを自分たちの役割として今後ずっと守っていきたいのです。それは、よそから来た先生たちだけではありません。住んでいる人たちも一緒にここに根を張って生活している者として何とか守っていきたいのです。

自然に変化するのだったら仕方がないけれども、それが人為的なものであることが残念です。そのためにも、しっかりとしたベースとなる地面の調査をやってほしいというのが地域の声だということです。これまで、10年ぐらいこの発言をしてきました。

長谷川さんがおっしゃっているからではないですけれども、知床岬の植生の変化をもう少ししっかりと見据えてほしいです。樹木はそうでもないですが、植相は1年、2年で変化します。そういった変化も報告してもらえそうな体制を取っていただきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

●北海道（島村） ほかにご発言はございませんか。

●斜里山岳会（滝澤） ヒグマ対策ということで、皆様から話をいただきまして、これから具体的な部分を検討していただけるということで、ある意味、安心はしましたが、スピード感についてはよろしくお願いします。

一つ確認とお願いです。

北海道警察の山岳捜査の統計上、今回の8月14日の遭難事故はどのように捉えられているか、既にご存じだと思います。

遭難者数は何人でカウントされているかご存じですか。

警察の発表だと2名なのです。1名が死亡、1名が遭難したということです。警察の発表でいけばそうなるのです。事故要因はその他なのです。分類ができないから、その他なのです。

今回、3月になっていろいろな資料をいただいています、山岳遭難という視点がすごく欠けているなと思いました。私は先ほど、遭難防止という観点からは危機感がないと言ったのは、山に登るときには、登山口に限らず、いろいろな登り方があるわけで、それに対する対策も必要だという視点も欠けているし、もし遭難になったときに、それに当たる人間は、今、北海道警察に山岳救助隊が整備され、それが拡充されたことで、山岳遭難防止対策協議会の出動がほぼなくなっています。

会議の中では、その部分も含めてご協議されていると思うのですが、オホーツク

地方における山岳防止対策協議会は、今、機能していません。もし山岳遭難が起きて、民間の隊員登録している隊員に救助要請、捜索要請が来て出動してくださいと言われても、出ることはできない状態になっています。山岳遭難防止対策協議会に出動をかけるのはオホーツク総合振興局長です。振興局が事務局なのです。

こういうヒグマのいる山でのいろいろな捜索活動の危うさも今回明らかになりました。これは、警察の組織が拡充されていますから、急ぎません。でも、実際に事故が起きた、けがをした人がいる、遭難した人がいる場所が分かっている状態ですと、警察はすごくスピーディーに救助に行けるけれども、行方不明になった人間を探すとなったら、人間を投入して面で調べなければいけません。そういうときには、遭対協なり消防や消防団などに要請をかけざるを得ません。

そういう部分に対して、ヒグマ対策をどうするのか、それも含めてしまったら、いつ登山道が開くか、分からなくなってしまうので、急ぎませんが、今後、この部分もぜひご検討ください。

これについても、前回のワーキンググループか何かの会議のときに事務局長から話をしておりますけれども、改めてこの場でもご検討ください。

遭対協という組織をどういうふうに機能させるのか、また、それに対するヒグマ対策についてもご検討していただければと思います。今回の会議の趣旨に合うのかどうか分かりませんが、よろしく願いいたします。

●北海道（島村） 遭対協の関係については、振興局の防災担当のセクションだと思いますので、今日ご意見をいただいた点について我々から伝えてまいりたいと考えております。

ほかにございませんか。

（意見なし）

●北海道（島村） 本日は、お忙しい中、科学委員会の中村委員長にもオンラインでご参加をいただいております。

中村委員長から、最後に一言、ご発言をいただければと思います。よろしく願いいたします。

●科学委員会（中村委員長） マイクの音が分かりづらいときがあったので、全部が正確に聞けたわけではないのですが、皆さんのいろいろなご議論を感じ取ることができました。

今日も現地に参加できずに申し訳ありません。

特に、今回の大きな話題であるヒグマの問題については、科学委員会でも深刻に受け止めています。ご存じのとおり、ヒグマのワーキング、もしくは、連絡会議を通じて座長の佐藤さんや愛甲さんといろいろな議論をしてまいりました。

遅いというご批判もお受けしました。ただ、安全を第一に、組織がきちんと動ける対策を組んでいかななくてははいけませんし、それが科学的に整合性のあるものにしなくてははいけ

ないということで議論してきたことをご理解ください。

科学委員会としても、先ほども岩尾別の問題が出ていたとおり、羅臼岳の登山道の問題だけではなく、ヒグマ全体の管理の問題について、過去にも一度声明を出しているのですが、今回、新たに3月末を目指して声明を出そうと思っています。

その内容は、今回議論されたヒグマ対策について齟齬がない形で出そうと思っていますので、それについてもいずれはご意見をいただければと思っています。

今日は、いろいろな意味で熱心なご議論をありがとうございました。科学委員会のメンバーにも伝えたいと思います。ありがとうございました。

●北海道（島村） 皆様、今日は、大変貴重なご意見、また、ご指摘をいただきまして、本当にありがとうございます。

本日本日予定していた議事は以上で終了となります。

最後に、次の地域連絡会議の開催予定地であります斜里町の山内町長からご挨拶を頂戴できればと思います。

●斜里町（山内町長） 皆様、お疲れさまでございます。

ご紹介をいただきました斜里町長の山内でございます。

日頃から、環境省、林野庁、また、本日の会議を招集いただきました北海道庁、各振興局など、それぞれの関係機関の皆様には、年度末の本当にお忙しいところ、羅臼町にお集まりをいただきまして、本当にありがとうございます。

また、本会場をご準備いただいた羅臼町の皆様にも、改めて感謝を申し上げます。

今、年度末と申し上げました。この年度末で部署が替わられる方もおられるかと思いますが、ぜひ、この地域を離れても知床のことを忘れず、思いを寄せていただければと思っています。

3月下旬は、ここ数年では流氷がない時期になっております。たまたま今朝、網走の海岸線の近くにもまだ少し流氷があるなというところを見させていただきました。

流氷がもたらす知床の生態系がこれからも続くような形で将来に残していけるよう、この知床を守り、また、みんなで共生を進めていかなければいけないということでこの世界自然遺産地域連絡会議があるのだということを改めて感じさせていただきました。

さらに、昨年、令和7年で国立公園60周年、世界自然遺産20周年ということで、様々な企画がされ、そして、知床世界自然遺産になった成り立ちの中では、この地域連絡会議の果たす役割は非常に大きいものだとして改めて認識させていただきましたし、感じさせていただきました。

また、今日の会議の中では、昨年8月14日に起きた羅臼岳での痛ましい事故のことについて議論がされ、また、これからの利活用について様々なご意見がありましたし、要望、要請、そして、苦言もしっかりと皆さんの言葉として発せられたのだらうと思っています。

す。こういった議論の中、この知床が知床であり続けるためにどうしたらいいのかという答えが出てくるのだらうと思っております。

今回は斜里町で開催されますけれども、皆さんの忌憚のないご意見の中、本当に素晴らしい会議だったと思っております。それぞれのお立場の皆さん、関係機関の皆さん、本当にありがとうございました。

本日お集まりの皆さん、また、オンラインでご参加をいただいた皆さんに対してもお礼を申し上げ、これからの知床のためにまたご活躍いただければと思います。

本日は、誠にありがとうございました。

●北海道（島村） 山内町長、どうもありがとうございました。

4. 閉会

●北海道（島村） 以上をもちまして、令和7年度第2回知床世界自然遺産地域連絡会議を閉会いたします。

本日は、ありがとうございました。

以 上